

邦楽の新しいカタチを追求して、 全邦楽が結集して魅せた渾身の舞台作品。

日本には、長唄、能、雅楽などさまざまな伝統音楽があるが、それが一堂に会した公演となると、そうそう見られない。今回開催された「邦楽で綴る『平家の物語』」は、それらが集まり、洋楽の要素を取り入れながら、義太夫や人形浄瑠璃と組み合わさった舞台で、邦楽の新しいカタチを追求する試みである。

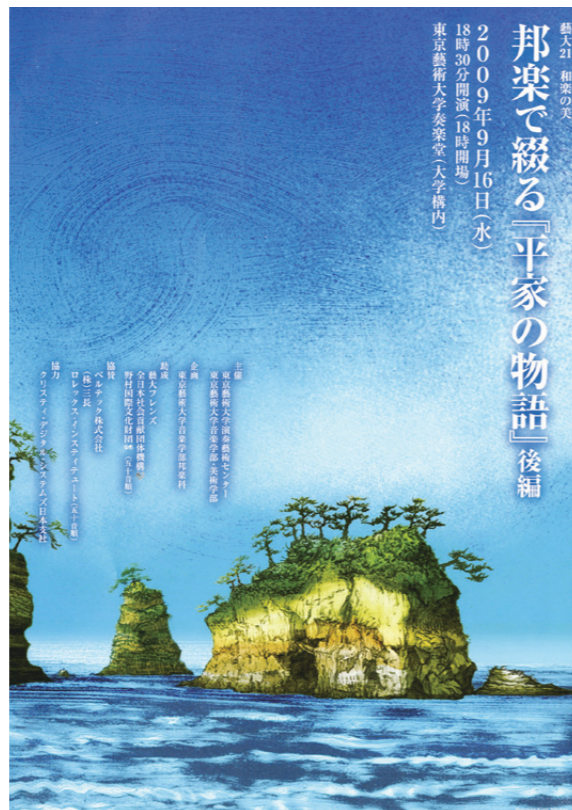
邦楽と洋楽、音楽と美術のコラボレーション。

2009年9月16日、東京藝術大学奏楽堂でたいへん珍しいコンサートが催された。「邦楽で綴る『平家の物語』(後編)」である。何が珍しいかというと、三味線、尺八、打物、箏、琵琶、長唄、など邦楽の楽器が大集合した上に、能や人形浄瑠璃が組み合わさり、さらにパイプオルガンが鳴り響くという無類の演奏会だったのである。

主催した「和楽の美 実行委員会」の代表で、東京藝術大学 音楽部教授でもある三浦正義さんはこの演奏会のねらいについて次のように語る。

「『和楽の美』は、21世紀に入って広い視野で今を見つめる企画「藝大21」シリーズの一つで、この『平家の物語』は前年度の前編に続いて2回目となりますが、内容的にはさらに濃いものになりました。邦楽の持つ古典としての様式美を再認識することはもちろんですが、そこに新しさを加えて今様の邦楽を模索し、総合芸術としての可能性を見いだしたいと考えています」

確かに演目は「平家物語」に沿って進行し、和楽器が中心であるから全体としては和風なイメージなのだが、アレンジや演出のさまざまな箇所に新しい試みがなされているのがわかる。その一つが、舞台の背景や床を彩るCG(コンピュータグラフィックス)だ。これは東京藝術大学の美術学部がこの公演のために作成したフルハイビジョンのCGである。平安京の秋の趣あるイメージから、海底までを見事に映し出す八島のうら寂しい浜の風情など舞台を盛り上げていた。音楽学部と美術学部のコラボレーションという意味からも意義があると三浦さ



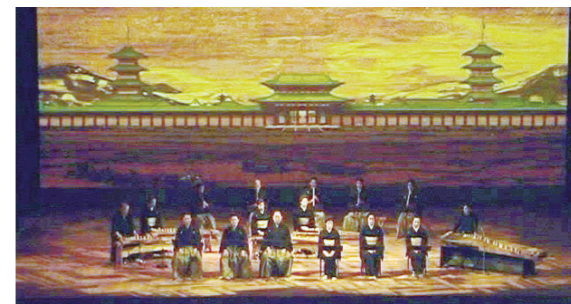
制作されたプログラム

さんは語る。

コラボレーションといえば、能や歌舞伎、義太夫、雅楽の分野などはそれぞれの世界を持っており、普段はほとんど交流がない。それが一堂に会し、一つの舞台作品を作り上げたのである。出演者も義太夫の竹本駒之助や人形師の辻村寿三郎、生田流箏曲の安藤正輝、能楽の関根知孝など、人間国宝級の一流が集まった。立場は違っても、それぞれが協力し合って伝統芸術の新しい道を探ろうという意識の表れといえるだろう。

目新しく耳新しい舞台に観客も大満足。

この日の演奏曲目は9曲。この公演のために作詞や作曲がされている。序曲から、辻村寿三郎が操る蝶の舞いと邦楽が人目を惹きつける。箏(ひちりき)の音が響き、パイプオルガンがそれをサポートする。異なる文化の音色のハーモニーは言葉では言い表せない味わいだ。同様



歌曲「今様」



義太夫・長唄「海の底の都 その1 入水」



人形師の辻村寿三郎氏も特別出演



CGを使用し、バックの風景を場面ごとに変化させている

にどの曲にもベースとなる古典芸能が生かされているものの、どこかに必ず新しさが見いだせる。曲間には朗読が入り、物語のサポートをしてくれるので見どころ聞きどころがとてわかりやすい。

義太夫と長唄の掛け合いもあった。壇ノ浦の合戦から安徳天皇が入水するシーンである。同じ三味線音楽でも、発声・三味線・演奏方法が異なる義太夫と長唄が源平の合戦さながらに、浄瑠璃、唄、三味線で戦うとい

担当者より



厳しい世の中にこそ邦楽が必要と考えております。

和楽の美 実行委員会 代表
三浦正義さん

私が思い描いていた以上の公演ができ、AJOSCをはじめご関係の皆様には御礼の言葉もありません。厳しい経済状況の中でのご支援に感謝いたします。またこういう世相でこそ、邦楽の持つ楽しみのある音楽が必要と考えております。今後も努力・精進して参りますので、ご支援いただければと存じます。

う手法である。このシーンが終わると背景のCGは、海上から海の底へと潜っていくように変わっていく。リアリティのある演出で、観客も安徳天皇となって落ちていくようでなかなか切ない。

ところが、このあとの海の底の都のシーンでは、パイプオルガンと箏の合奏が流れ、幻想的な舞台に変身する。静かな雰囲気の中で、人形の安徳天皇が童女と舞い遊ぶ。母を思い出して恋しく思う安徳天皇。唄も発声は邦楽ながら、メロディは西洋の宗教音楽がモチーフとあって、なんとも不思議な世界が展開された。

8曲目の「念仏踊り」は打って変わって賑やかな演目だ。鼓や太鼓がまるでサンバのようなリズムを刻み、人々が楽しそうに舞い踊る。そして、エピローグは全楽器と唄が集合して、邦楽オーケストラの様相となった。「祇園精舎の鐘の声…」が、これほどの迫力のある音色で唄われたことはなかったに違いない。邦楽なのに指揮者がいるというもおもしろい。

どれもこれも、目新しく耳新しい内容に観客からも大好評で、定期的に開催して欲しいという声が多く寄せられたという。三浦さんは

「これだけのメンバーを集めるのは至難の業ですので、そうそうは行えませんが、これからも邦楽のすばらしさを伝承していくための試みを続けていきたい」と満足そうに語ってくれた。